

早稲田大学大学院日本語教育研究科

# 博士学位申請論文概要

## 論 文 題 目

留学生活における言葉の学びと日本語教育  
— 韓国人留学生のライフストーリーから —

申 請 者

三代 純平

2010年 9月

本研究は、韓国人留学生のライフストーリーから、留学生の言葉の学びを明らかにすることを目的としている。以下が各章の概要である。

## 第1章 留学生生活を支えるための日本語教育

第1章では、本研究の問題の所在を私自身の研究の変遷と社会的状況から述べる。自分の研究からは、「日本事情」教育の実践研究が教室の中の議論に終始するが、社会的な問題は社会の中で構成されているという問題点を指摘し、教室外の生活を視野に捉えることの必要性を指摘する。また、社会的状況として、留学生政策が留学生の日本での就労を視野に入れて展開していることから、留学生が日本で生活していくことを支えていく形で日本語教育を考えなければならないことを論じる。

その上で、本研究の目的として、留学生が留学生活を通じていかなる学びを形成し、それを支えるためにいかなる日本語を必要としているのか、そしてその日本語をいかに学んでいるのか、または学ぶことにどんな困難を抱えているのか、を韓国人留学生のライフストーリーから明らかにすることとして挙げる。

## 第2章 研究の視点と方法

第2章では、第1節において、先行研究のレビューを行うことで、研究の視点を明らかにし、第2節において研究方法について説明する。

第1節の先行研究レビューでは、まず、日本語教育におけるコミュニカティブ・アプローチからネットワーク研究までを概観し、社会の中で日本語を学ぶという視点から日本語教育を考えた意義と、日本語と日本文化を本質化して捉えた問題に言及する。さらにこの言葉と文化の本質主義の問題とそれに対する批判を「日本事情」教育の議論を中心に検討する。その上で、ア prioriに習得すべき「日本語」・「日本文化」を設定するのではなく、生活の中で、留学生自身が何を言葉の学びとして捉え、それをどのように学んでいるのか、という視点で言葉の学びにアプローチする必要性を主張する。具体的には以下の点の考察を、本研究の目的とする。

- ・韓国人留学生は、留学生活を通じた「学び」をどのように捉えているのか。
- ・その「学び」はいかにして形成されているのか。
- ・「学び」の過程で日本語によるコミュニケーションはいかに機能しているのか。

- ・どのような日本語を必要とし、日本語の学びをどのように捉えているか。
- ・その日本語の学びはいかに形成されているのか。

これらの課題を考察するために、本研究ではライフストーリー研究法を採用した。その理由と方法について第2節において論じる。第2節では、ライフストーリー研究法が、シンボリック相互作用論や社会構成主義の議論を受容しながら発展し、人々の主観的世界を考察することに優れていることを論じる。さらに、具体的なインタビューの方法について、「サンプリングの方法」「インタビュー方法」「ラポールについて」「研究倫理について」という観点から説明する。さらに収集されたインタビュー・データの分析について、「濃い記述」の議論に基づき論じる。

尚、ライフストーリー調査は、2006年から2009年にわたって4年間、35名の韓国人留学生に対して行った。本研究では、その内、13名（1名はワーキング・ホリデーから専門学校へ、もう1名は専門学校から大学へまたがって登場する）を特に取り上げて論じる。

### 第3章 韓国人留学生の背景

第3章では、韓国人留学生のライフストーリーが語られる背景を理解するために、韓国における日本語教育の歴史と現状について概観する。また、来日した韓国人留学生の経験に関する先行研究を批判的に検討する。

第1節では、韓国において日本語教育がどのように行われてきたか、その歴史的展開と現状を先行研究や韓国教育開発院の統計資料、韓国の学校教育の指導要領である「教育課程」の日本語科に関する記述等をもとに論じる。韓国では、終戦、解放後、しばらくの間、日本語が公の場で教えられることはなかった。韓国における日本語教育が再開されるのは、1960年代に入ってからである。それも一部の大学で細々と教えられているにすぎなかった。転換期は、1973年に高校の第二外国語として日本語が採用されたことである。当時は、公教育において日本語教育を行うことに対する反対も強かったが、日本からの技術の吸収という目的や経済的なつながりから、「実用語」として日本語を受容する路線がとられた。徐々に日本語学習数は増加し、80年代には実業系高校を中心に第二外国語の中で履修者が最も多い言語となる。さらに、1998年からの文化開放を機に日本の大衆文化人気に支えられた日本語学習者の増加が目立つ。このような経緯から、日本語に対する社会的にネガティブなイメージと大衆文化人気

などに支えられた動機が入り混じった状況で韓国では多くの人々に日本語が学ばれている。

第2節では、日本へ留学した韓国人の生活に関する先行研究のレビューを行う。研究は、1980年代の韓国人留学生に関するものに遡る。当時は、日本が受け入れている留学生自体も少なく、アジアの発展へ貢献するための人材育成という要素が強かった。韓国からの留学生も理系分野の大学院生が多く、理系大学院、国費、男性への調査が主である。彼らは、留学後、研究職についており、日本で身につけた専門性に満足する。一方、日本理解は進んだとするが、日本人とは付き合いにくいと感じている。その理由は、日本人は心を開いて話さないことにあるとされる。90年代以降の研究でも、日本人とは付き合いにくいと感じている韓国人留学生が多いことが繰り返し報告されている。研究の対象は国立大学の留学生が多くなっている。一方、ワーキング・ホリデー・メーカー（ワーキング・ホリデー制度の利用者、以下「WHM」）や専門学校で学ぶ韓国人留学生は数が増加しているのにもかかわらず、現在まで研究対象になってはいない。

#### 第4章 ワーキング・ホリデー・メーカーのライフストーリー

本章では、韓国からのWHMのライフストーリーから彼ら／彼女らの学びの形成について考察する。

第1節では、ワーキング・ホリデー（以下「WH」）の制度、現状について説明する。日韓WHは、1998年の協定が結ばれ、1999年から開始された。徐々に査証発給枠が拡大され、2009年現在では7,200となっている。韓国から日本へのWHは人気が高く、毎年査証発給枠いっぱいの査証が発給されている。年間に韓国から就学ビザで来日する学生が約9,000人であることを考慮すれば、この数は大きい。そして、このWH制度は、語学留学の一形態として韓国や日本では定着しているのである。

第2節では、WHMがどのような経緯と目的で来日しているのかを5名の調査協力者（以下「協力者」）の語りから考察する。WHMの多くは日本語既習者で、大学の日本語関連の学科に所属している大学生が休学して来るケースや、高校生の時、または専門大学生の時に日本語を勉強し、日本の専門学校への進学を目指して来るケースが多い。

WHの目的は、若者の異文化間交流とそれを通じた二国間の友好促進とされているが、協力者たちがWHで来日した目的は大きく「日本語学習」「交流」「貯蓄」「進学準備」「自分探し」の5つに分類できる。ただし、この中の一つの目的を意識してWHを選んでいるのではなく、

この中のいくつかの目的を複合的に持って来日している。また、来日後の生活を通じて WH の目的は少しずつ変化していくこともわかった。さらに、これらの 5 つを目的として WH を選択する背景には日本への関心、韓国の留学事情、日本語学校の受け入れ制度などがある。

第 3 節では、WHM の学びの形成について考察する。5 名の協力者の生活の主なネットワークはアルバイトの職場であった。これは、WHM が生活費を自分で稼ぐ場合が多いことから、一般的なことである。協力者たちは WHM として日本で過ごした生活のストーリーを、職場での人間関係形成のプロセスとして語った。そして、それは同時に彼女たちにとって、コミュニケーションを学ぶプロセスとして捉えられていた。

学びの形成プロセスは、「人間関係構築の困難」で始まる。「機会の欠如」「日本語の問題」「境界意識」「反日感情」「差別体験」が日本人との人間関係構築の困難の原因として捉えられている。この状態の時、自分は社会の中に居場所を感じられず、自分は日本人社会に受け入れられていないという意味での「外国人意識」が強くなる。また、人によっては交流の意思を失い、貯蓄などが目的化する。

次に、「人間関係の変化」を経験する。新たな職場を探すなど、出会いの機会を積極的に作ることで変化を図った協力もいた（「機会の創出」）。何らかの形で協力者が自らの態度を変化させることで人間関係も変化したと変化の理由を自己の他者に対する態度の変化とする場合もある（「態度の変化」）。協力者たちは、その中で「個人化した接触」を経験し、「境界意識」に疑問を抱くようになり、人間関係はそれまでの韓国人の私と日本人たちという境界を前提とした関係から徐々に変化する。「個別化した接触」とは、日本人と韓国人のように、あるカテゴリーを前提とした関係ではなく、他でもない「私」と「あなた」という関係を前提とした接触のことである。また「境界意識」とは、韓国人と日本人は違う、というような心理的に構築された境界のことである。このような人間関係の変化の結果、アルバイト先などで一人の仲間として認められる（「メンバーシップの獲得」）。この時、自分はそのコミュニティの一員として参加しているという実感を抱き、そのコミュニティを自分の居場所と考えることができるようになり、「外国人意識」も変化する。協力者はこの「コミュニティ参加の実感」に WH 生活の大きな満足を見出している。そして、彼ら／彼女らはこの一連の変化を支えるコミュニケーションを学びとして捉えていた。

WHM の学びは、人間関係構築のストーリーに埋め込まれている。WH の目的として、「日本語学習」と「交流」があったが、協力者たちは、WHM の学びとして、「日本語」「コミュニ

ケーション」「人間関係」を挙げている。日本語能力向上、またはアルバイトの際や若者同士が使う言語行動を含む日本語によるコミュニケーション能力の向上、また能力ではなく、コミュニケーションをよくとることの大切さ、話せばわかり合えるという実感、人間関係の大切さ、などである。重要なことは、それらは別々の事象、別々の学びではなく、一つの大きな過程のさまざまな側面であるということである。

第4節は本章のまとめとして、日韓 WH 制度の意義と課題を「日本語学習」と「交流」という側面から論じる。WH の意義は、アルバイトのコミュニティ参加のプロセスを通じた「交流」とその中で学ばれる「日本語」である。人間関係の構築、コミュニティ参加自体が、交流であり、日本語学習である。そのプロセス全体として「コミュニケーションの学び」を形成している。一方、WH の課題は、コミュニティが職場に限定されすぎていることで、職場環境が悪い場合、交流も日本語学習もままならず、対日イメージも悪化する。そしてそのような WHM は少なくない。また、職場の関係として人間関係を構築できた場合も、友人関係になるとは限らず、友人が欲しいという希望を持つ WHM にとっては満足できなくなっている。そのような状況を改善するように、WH が職場以外のネットワークにアクセスしたり、環境の良い職場を見つけられたりするような情報を提供するプラットフォームの構築が望まれている。

## 第5章 専門学校生のライフストーリー

第5章では、韓国から日本の専門学校に留学した留学生の学びの形成について考察する。

第1節では、専門学校における留学生の現状を、韓国人留学生を中心に論じる。まず、各種統計や社団法人東京都専修学校各種学校協会が発行する『留学生受け入れガイドブック』、全国学校法人立専門学校協会が毎年行っている「専門学校における留学生受け入れ実態に関する調査」を分析する。また各資料より明らかではない、韓国人留学生の専門学校への進学実態について、首都圏にある日本語学校の進学担当者への聞き取り調査を行った。これらの調査から、専門学校へ進学する韓国人留学生が増加傾向にあること、特に就学生として来日する韓国人留学生の多くが専門学校を希望していることがわかった。また日本語が十分にできないで専門学校へ入学していることや卒業後の就職先が限られていることが専門学校で問題視されていることがわかった。

第2節では、どのような経緯、目的で専門学校の留学生が来日しているのかを5名の協力者の語りから明らかにする。協力者たちの留学の目的は、「専門知識・技能の習得」「学歴の取得」

「日本での就職」「日本語を生かした進学」「大学進学準備」の5つのカテゴリーに分類できる。そしてその背景には、日本の大衆文化の人気や日本語学習者層の広さに加え、韓国の進学、就職事情が大きく関わっている。専門学校を希望する韓国人の多くが、韓国国内の大学受験を回避したか、地方の大学を中退し、来日している。加熱する受験競争への忌避感や地方大学の就職難が留学動機として大きくある。そのような韓国人留学生は、専門学校進学を決めている点で留学目的がはっきりしていると考えられているが、実は、漠然とした関心に基づき留学している。画一的な受験、就職の流れに逆らう中で、自分がどうありたいのか、その実存的疑問と向かい合う、「自分探し」の留学の要素が強い。

第3節では、そのような専門学校生の学びの形成を分析する。協力者たちは、主に、専門学校のクラス、専門学校内・外の韓国人コミュニティ、アルバイトを主なネットワークとして活動している。その生活の中で学びと捉えているのは、専門の知識や技能の習得を意味する「専門の学び」と日本語習得、コミュニケーション・スキルの向上、人間関係の大切さへの気づきなどの「コミュニケーションの学び」である。「コミュニケーションの学び」はWHMの学びと大きく重なる。ただし、アルバイトよりも、専門学校のクラスを中心としている。そして、WHMの学びは、彼女たちが「日本語習得」や「交流」を来日目的としていたために、「コミュニケーション」に関する学びを中心に学びの形成が語られたが、専門学校の場合は、「専門の学び」が重要な要素となる。だが、「専門の学び」は、クラス活動に参加することによって形成される。専門学校では、調理実習や市場調査など、チームで行う活動が多い。クラス活動に参加することと「専門の学び」は密接に結びつき、クラス活動に参加するためには、クラスメイトとのコミュニケーションが重要になっている。そこで、協力者たちはコミュニケーションの重要性を感じ、「専門の学び」と同様に、それを支えるコミュニケーションを大きな学びとして考えていた。

だが、同時に、多くの韓国人専門学校生はクラス活動に参加できずにいる。その要因として、「日本語の問題」「年齢差」「反日感情」「差別体験」「外国人扱い」「境界意識」がある。一方、それを乗り越えて、クラス・コミュニティに参加した協力者は、継続的にコミュニケーションを重ねることにより、また、公私にわたって、さまざまな経験を共有していくことにより、「日本人」「韓国人」という関係性に基づかない「個別化した接触」を経験していく。それは、さらにコミュニティのメンバーシップを獲得することで「私たち」という新しいアイデンティティを形成していた。

第4節では、本章のまとめとして、専門学校で求められる日本語支援について論じる。現在専門学校では日本語支援は行われていないか、資格試験対策などを中心に課外授業として付加的に行われているにすぎない。だが、資格試験以上に大切なのはクラスというコミュニティに参加していくことである。その参加を支援する形の日本語支援を考えなければならない。また、協力者たちは、自分が何をやりたいのか、明確な目標を持たずに悩んでいた。同時に将来的に日本で就職することを希望している。少子化の中で、外国人の就職を推進している現在、そのような留学生の包括的な支援が重要になっている。ただし、韓国の社会状況、韓国人の就職希望と、日本の少子化対策としての外国人労働者受け入れ、そのための専門学校における留学生受け入れというのは、必ずしもマッチングしていない。その隙間で、日本の専門学校留学自体が、韓国人留学生たちの将来の選択肢を狭めているケースも多い。留学というものがライフコースの中で持つ意味を考えるということも必要である。

## 第6章 大学生のライフストーリー

本章では、大学生、特に、私費で留学してきた文系学部生のライフストーリーを分析する。先行研究は、国費、理系、大学院の学生が対象となることが多いが、韓国人留学生の多くは私費で文系学部で留学してくる学生である。よって、本研究では、私費の文系学部生を調査対象とした。

第1節では、韓国人留学生の大学への留学状況を俯瞰し、先行研究から指摘されている問題点を整理する。第2節では、5名の留学生の語りから、留学目的とその背景にある動機を考察する。留学目的としては、「専門知識・技術の習得」「学歴の取得」「日本での就職」「日本語を生かした進学」の4つが挙げられる。その背景としては、専門学校と同様、韓国の受験、就職事情がある。ただし、専門学校の協力者は受験制度自体を敬遠し、「自分らしさ」を学びの中心にしたいという希望があったのに対し、大学生協力者は、韓国における大学進学代わりに、日本の大学を選択しており、受験競争の延長として留学を捉えていた。

第3節では、大学生の学びの形成について考察する。WHMや専門学校生に比べ、大学生の特徴はその多様性にある。滞日期間も長くなり、ネットワークも多様であり、留学目的もさまざまであることから、学び自体も人により大きく異なる。ネットワークは、ゼミ、サークル、外国語のクラス、学内の韓国人、学外の日本人、学外の韓国人、日本語の授業のクラスメイト、教会、アルバイトと多岐にわたり、人によって生活の中心となるコミュニティが大きく異なる。



留學生活を通じた学びをどのように考えるかということも多様である。ある協力者は大学自体には何も期待していないと語り、その時間を使い、自分が将来行いたいと考える事業の準備期間としていた。ある協力者は、学部の授業で得た知識を学びの中心に据えていた。また、サークルや学部などで出会った人間関係の中でのコミュニケーションを学びとして位置づけている協力者もいる。だが、それぞれ、学びが起こるコミュニティを持っていて、そこでの人関係の中で日本語を学んでいると感じている。学外の活動に力を入れている協力者は、そこで日本語を学んでいると感じているし、学部の授業を重視する協力者はそこで日本語を学んでいると語る。また、韓国人留学生会とゼミ、双方に参加することで、「就職へ向けた学び」を形成する協力者のように複数のコミュニティに参加することによって、総合的に学びを形成する協力者もいた。

第4節では、第3節の個々の学びの語りを総合的に考察する。大学生協力者は多様なコミュニティに参加して学びを形成した。しかし、多様なコミュニティに開かれている大学生活は、逆に、自分がメンバーシップを持って、安定的に参加できるコミュニティがないということも意味していた。なかなか日本人のいるコミュニティに参加できず、韓国人留学生のみのコミュニティに落ち着いていく協力者も少なくなかった。大学生の協力者もまた、WHMや専門学校生の協力者と同様、コミュニティ参加を通じて学びを形成していたが、その参加に大きな問題を感じていた。そこには、日本人と韓国人は違う、という「境界意識」が強く作用していた。

その「境界意識」を乗り越え、コミュニティへ参加したときに学びの形成があった。「境界意識」を乗り越えるプロセスは、一つではなかった。ある協力者は、「個人化した接触」から、自らの「境界意識」はステレオタイプだったと捉え返していた。またある協力者は、「日本人」「韓国人」という境界は維持していたが、違いはあっても、深く付き合えば、わかり合えると考えていた。コミュニティ参加に成功した協力者に共通していたのは、「境界意識」の捉え方ではなく、わかり合える人間関係を持っているという経験から来る、「受け入れられている」「わかり合える」という実感であった。このような実感の中に言葉の学びもあった。

一方、大学では、日本語教育が行われており、多くの協力者が日本語の授業を受けていたが、協力者たちは、会話を中心とした日本語は授業よりも、自分の所属するコミュニティ内でのコミュニケーションを通じて学んでいると感じていた。そして日本語のクラスには学部の授業に対応するより実践的な授業を期待する一方、日本語のクラスが、他の留学生との交流の場になっていること、そこでは自分の日本語にコンプレックスを感じずに気楽に話せることを高く評

価していた。その語りから、日本語能力の育成だけではない、日本語の教室の意味が見えてきた。この議論は改めて第 8 章で論じられる。

## 第 7 章 コミュニティ参加という言葉の学び

第 7 章は、WHM，専門学校生，大学生のライフストーリーの考察から明らかになった，コミュニティ参加という言葉の学びについて論じる。

第 1 節では，まず，留学生がアイデンティティ交渉の中で，期待された自己へ近づいていく実感として学びが実感されていたことを述べる。第 2 章において，本研究における学びとは，留学生の主観的な実感に根ざしたものであるとしたが，それは，アイデンティティ交渉により自己の成長を感じるときに実感されるものであった。その時，韓国人留学生の学びを理解する上で重要となる概念が「自分探し」であった。「自分探し」とは，まず，自分は何者なのか，何者になれるのか，という成長のプロセスで見られる問いである。だが，それは，同時に，後期近代社会に特徴的な，アイデンティティ不安から来る，「自己実現」への過剰な欲求とも考えられる。韓国社会では，一方で，加熱する受験競争の中で，有名大学・大企業への就職が志向されている。他方，「自分らしさ」「個性」などを生かした生き方をすることはいいことだという言説もある。その葛藤の中で，「自分らしさ」と就職を結びつけるために日本留学という選択が行われていた。それは，近年増加する専門学校への留学生に顕著な傾向であった。そのような「自分探し」の留学を企画する留学生にとって，留学と言葉の学びは，期待された自己へ向かった交渉，自己への投資としての意味と，不確かな未来の自分へと自己を投げ出す投企としての意味があった。

そして，投資と投企としての留学と言語学習が，アイデンティティの葛藤と交渉を通じて行われている場がコミュニティである。だからこそ，そのコミュニティの中で，期待された自己も形成され，そこへの接近もコミュニティの中で実現していく。そのために，協力者たちは，コミュニティ参加を留学生活の学びとして位置づけていた。さらに，そのコミュニティの中で人間関係を作っていくのがコミュニケーションであった。コミュニティ参加とコミュニケーションは一体のものである。だからこそ，言葉の学びはコミュニティ参加として理解されるのである。

だが，同時に，言葉の学びとしてのコミュニティ参加に，多くの韓国人留学生が困難を覚えていることも調査からわかった。第 2 節では，その原因と参加の困難を乗り越えてコミュニテ

ィ参加を実現した留学生のストーリーが示唆する参加のために必要なものとは何かについて論じる。コミュニティ参加の困難の原因として、相互行為の中で社会的に構築されている「境界意識」、またそれを維持するような環境の境界、さらにそれらの境界を正統化する言語学習観がある。コミュニティ参加には、コミュニティの一員としての「メンバーシップ」が必要である。それは、「私たち」というアイデンティティに支えられている。だが、「境界意識」により、日本人と韓国人はわかり合えないという前提を作ってしまうと、そのようなアイデンティティ形成は困難になる。また、日本語学校、大学など、基本的に、留学生が日本人学生たちと活動を共にし、継続的なコミュニケーションを続けながら経験を共有していく、という場所自体が制度的に確保されていない。むしろ、日本語支援は、留学生のみを対象とってしまうことでコミュニティ参加を難しくしている。このような状況が維持されている背景には、言語学習とは能力の習得であるという考え方がある。個人がある能力を持つことで、その能力を使用し、学生たちはコミュニティへ参加できるという考え方である。このような考え方が、留学生のみを集めて能力の育成を目的とした教育実践に特化することを許容する。それが社会的な組織化の中で、留学生が周辺化されるシステムに組み込まれている。

しかし、協力者たちが、言葉の学びとしていたのは、コミュニティ参加そのものであり、ここでの実際の人間関係との相互行為の中にしか学びはなかった。それは、能力の議論に回収されるものではなく、むしろ、「わかり合える」「受け入れられている」という実感がコミュニケーションを支えていた。人間関係構築の困難、アイデンティティの葛藤に悩みながら、それでもコミュニケーションを継続し、多くの経験を共有すること、そこで「個別化した接触」に基づいた関係を取りむすび、「私たち」というアイデンティティを構築していくことによってしか、コミュニティ参加は成しえない。そして、その参加という経験とその経験が築く絆こそが言葉の学びなのである。

## 第8章 日本語教育という場の再構築への試／私論

最後に、第8章で、本研究の結論と展望として、日本語教育のパラダイム転換とそのための私自身の実践について述べる。

第7章において、コミュニティ参加そのもののプロセスが言葉の学びであること、そして、それは継続的なコミュニケーションと経験の共有により得られる「わかり合える」「受け入れられている」という実感に支えられていることを述べた。このような学びは、個人の能力の育

成という学習観からは捉えられない。そこで、本章第1節では、日本語教育のパラダイム転換として、能力から場への転換を提案する。

コミュニティ参加を言葉の学びとする視座は、日本語教育の目的を、ある能力の獲得ではなく、人々との出会いや経験の共有、そこで築く人との絆として捉え直す。それは、日本語教育の議論を、能力をめぐる議論から場の構築をめぐる議論、つまり、日本語教育が社会的にどのような機能を担っていくのか、日本語の教室がどのようなコミュニティであるべきなのかという具体的な議論へと転換する。「経験」と「絆」を学びの中心とした場所としての日本語教室、さらには日本語教育という言説空間を再構築することこそが日本語教育のパラダイム転換なのである。

第2節では、日本語教育という場がどのような場として組織されるべきかについて、「第三の場所」と「公共圏」という二つの概念から論じる。「第三の場所」としての日本語教育とは、無数のアイデンティティが交差、葛藤、交渉し、差異を前提とした「私たち」というアイデンティティを形成していく場所のことである。そして、「公共圏」とは、一つ一つの「第三の場所」が開かれ、相互浸透的により大きな社会を形成していくことをイメージしている。つまり、新しいパラダイムの日本語教育という場は二つの方向性を併せ持って組織される。一つは、留学生にとって「私たち」というアイデンティティを経験できる場である。もう一つは、他のコミュニティと連携していくことで、留学生が本当に参加したいコミュニティへの参加を支援しながら、社会全体が「第三の場所」のような空間になることを志向する場である。

このような場の形成に対して、他人事のように「示唆」を述べることは本研究の意図することではない。だが、同時に、私一人の実践が、このような場を形成するという主張は説得力を持ちえない。そこで、第3節では、現在私が参加しているコミュニティ、そこでの私自身のアイデンティティ交渉を通じて、多元的なアクション・リサーチを展開することで、多くの仲間たちと共に、この場の形成に向けて取り組んでいることを、そしてこのような協働に基づく多元的なアクション・リサーチこそが新しい日本語教育の場を構築するために必要であることを、今後の展望として述べる。